

知求会ニュース

2004年09月

第11号

◎ 海外大学教員初誕生

大学院修了後、カナダに移住された国際文化研究専攻2期生のイワノワ・ゲルガナさんが、9月からヨーク大学の日本語非常勤講師になられました。大学院での研究成果を活かした活躍を祈念します。次号には、彼女の近況報告をお願いしています。

◎ 平成16年度修士論文中間発表会開催

毎年恒例の中間発表会が6月16日(水)に開催されました。発表者は、国際社会研究専攻者13名(内留学生6名)、国際文化研究専攻者14名(内留学生9名)の計27名です。国際社会研究の研究対象国は、日本・トルコ・ドミニカ・カンボジア・中国・アメリカ・インドネシアで、今年は国際文化研究の論文指導者に少し偏りが感じられました。

◎ 世界遺産シンポジウム開催

7月9日(金)午後1時から4時まで、宇都宮大学・大学会館多目的ホールにて、宇都宮大学法人化記念+国際学部創立10周年記念の国際シンポジウム「世界遺産と国際学术交流」が開催されました。当日の参加者は450名におよび、学部生・院生・卒業生・教職員等大学関係者にとどまらず、日光市民をはじめ広く県民の方の参加がありました。なお、多目的ホールのほかに第2会場が設けられましたが、そこも満員でした。また、シンポジウムにあわせて大学会館内の通路で各国大使館等の協力を得た世界遺産写真パネルの展示が行われ、さらに留学生が中心となり、お国自慢コーナーを設けて、民族衣装や民具等の展示が行われました。報告者は、1番目に「チェコにおける世界遺産」と題して、パラツキー大学副総長ミラダ・ヒルショヴァー氏で、ビデオ映像を使った世界遺産の紹介がありました。建築を学ぶ人にとっては、博物館のような印象を受けたのではないのでしょうか。2番目に夏期集中講義でお世話になっている上智大学教授の石澤良昭先生により「世界遺産の保全修復と国際交流」がOHPによる写真で、アンコールワットの事例が紹介されました。近年、多くの観光客が訪問することによる観光経済とさまざまな環境問題との折り合いが懸念されます。3番目に外国人教師として在籍しているハバナ大学教授ペドロ・モンレアル先生により「世界遺産と地域振興」と題して、パワーポイントによる魅力あるスライドが紹介されました。旧市街が魅力あふれる場として再生されているのには驚きました。最後に日光ユネスコ協会副会長原澤健太氏により「世界遺産の学術調査と地域振興」と題して、スライドによる熱のこもった報告がなされました。これらの報告は、すべて英語による発表でした。この後のパネルディスカッションでは、高際先生が司会進行役、米山先生がヒルショヴァー氏の通訳、中戸先生がモンレアル先生の通訳としてシンポジウムを補佐されました。満席の会場から活発な質疑応答がありました。その中で主な点を挙げますと、一つ目に、

旧社会主義体制下での状況について、チェコ・キューバ・カンボジアのそれぞれの国から説明がなされました。二つ目に日光の事例のなかには、明治期の神仏分離により首のない石仏があり、歴史から学ぶ必要性を原澤氏は指摘しました。三つ目に、文化遺産の都市における問題点について、チェコ・キューバから説明がなされました。また、日光の事例では住民と世界遺産の関わりについて報告がなされ、面として山全体を登録すべきところ、生活空間を切り離し二社一寺の点として登録せざるを得なかった点が強調されました。本年は、「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されましたが、原澤氏による法螺(ほら)貝の修験道にまつわる 2 曲が実演されました。1 曲は熊野と共通の曲、もう 1 曲は日光にゆかりのある復興された曲でした。四つ目に、自然保護と観光について、チェコ・キューバ・カンボジアから説明がなされました。時間の関係でまとまった結論は出せませんでした。参加者に対しては、大いに刺激を与えたのではないかと思います。このシンポジウムを出発点として、継続的な国際学術交流がなされることを祈念し、また日光の地域振興に貢献すべく、さまざまな工夫を切に願います。なおこのシンポジウムの掲載記事は、7 月 10 日付けの下野新聞で紹介されました。

◎ 国際学研究科主催第 6 回サテライト公開授業開催

国際学研究科公開授業が、国際化と日本Ⅱー「**市民レベルの国際交流・貢献に向けて(2)ー多様な歴史と方法ー**」と題して、下記の日程で開催されます。

第 1 回 10 月 21 日(木) 柄木田康之(教授)

ー文化人類学の研究基盤としての国際交流・貢献

第 2 回 10 月 21 日(金) 松井貴子(助教授)

ークロス・ジャンルの成功～西洋美術から日本文学へ～

第 3 回 11 月 05 日(金) 中村 真(助教授)

ー国際交流における非言語的コミュニケーションの役割

第 4 回 11 月 11 日(金) 中戸祐夫(助教授)

ーアメリカ・日本・韓国をめぐる国際関係

第 5 回 11 月 19 日(金) 阪本公美子(講師)

ーアジア・アフリカ諸地域における住民参加

会場：彩の国 8 番館産学交流プラザ 9 号室 JR 宇都宮線・高崎線・京浜東北線さいたま新都心駅西口徒歩 3 分において、開講時間は全 5 回午後 6 時から 8 時 45 分まで。

受講料：教材費二千円(各回 400 円) ただし、宇都宮大学 大学院生は無料です。

申し込み方法：住所・氏名・連絡先電話番号を記入の上、はがき、ファックス、メールにて申し込んで下さい。

問い合わせ先：〒321-8505 宇都宮市峰町 350 宇都宮大学国際学部総務係

TEL 028-649-5164 FAX 028-649-5171

E-mail:naokiw@cc.utsunomiya-u.ac.jp

◎ 宇都宮大学同窓会連合会(仮称) 設立に向けて

同窓会会長と学長等との打合せ会が、国立大学法人化後の第1回目として5月1日(土)午後1時半から学長室にて、大学側から田原学長、太田理事(学務担当)、西田理事(研究担当)、吉田理事(総務担当)、仁平学生生活課長、国府田総務課長補佐の6名、同窓会側から農学部同窓会村松会長、教育学部同窓会増田会長、工学部同窓会会長吉沢会長、国際学部会長吉葉会長、国際学研究科同窓会土屋会長の5名が出席して行われました。昨年の5月22日(木)に懇談会が行われた際に、国立大学法人化に合わせて大学同窓会の設立希望が学長から述べられていました。これを受けた形での具体化するための会合でした。各同窓会の現状報告がなされ、各同窓会の歴史と立場の違いが改めて確認されました。今後の課題として、具体化するための資料により、定期的な会合を持つことで打合せ会は終了しました。第2回目として夏休み中の8月21日(土)午後1時半から本部第2会議室にて、大学側から田原学長・太田理事・西田理事・吉田理事・高橋理事(財務担当)の5名、同窓会側から農学部同窓会村松会長・和賀井副会長、工学部同窓会吉沢会長・落合新会長・安達副会長・直之新副会長、教育学部同窓会小林会長・金崎評議員・山崎事務局長、国際学部同窓会吉葉会長・岡田(正)副会長・岡田(英)副会長、国際学研究科同窓会土屋会長の13名が出席して行われました。大学側から中期目標・中期計画などの資料や新聞掲載記事による近況報告がなされました。また、同窓会連合会会則(案)や九州大学同窓会連合会の資料を基に、活発な意見交換が行われました。結論としては、各同窓会に会則(案)を持ち帰って検討すること、また平成17年4月1日を設立目標とすること、次回打合せ会を11月か12月に開催することを確認しました。この後に、大学側から課外活動共用施設の建設について説明がなされ、同窓会からのさまざまな協力支援が要望されました。今後の大学運営を考えますと、大学と同窓会(現役学生を含めて)、地域の三者連携が重要課題のように思えます。

研究室訪問 03 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第3回目には、現在産休中の高橋若菜先生にお願いしました。なお、先生は7月19日無事女の子を出産されました。新しい命の誕生、おめでとうございます。

「地球環境政策研究の方向性についての雑念」

高橋 若菜

土屋さんから、現在の研究テーマに関して何か書くよう依頼を受け、産休に入る6月末を目処にということでお引き受けした。学部長の藤田先生を始め、国際学部の諸先生方・皆様の暖かい心遣いをいただいて、前期授業を滞りなく終了し、6月18日に最近無事に産休に入ることができた。しかし、いざ原稿を書く段になって、今後1年余ほど研究の前線から遠のくわが身に気づき、正直途方にくれてしまった。

考えてみれば、宇都宮大学に赴任してからの1年半は、授業準備や学務等に多くの時間を割いてきた。そのため、新たな研究課題に取り組む余裕はなく、研究活動がやや後回し

になった感は否めない。ここでは、前職時代からの継続研究を一部ふりかえりつつ、地球環境政策研究の方向性に関する雑念を述べたいと思う。

私が前職場や他大学・環境関連の研究所の研究者達と行ってきた共同研究の一つに、「バルト海沿岸地域及び東アジア地域における環境政策面での地域比較研究」というものがある。この研究は、酸性雨及び海洋環境の二つの問題領域を取り上げ、バルト海沿岸地域と東アジア地域との地域環境政策の比較検討・評価を行い、先進的取り組みを行ってきたバルト海沿岸地域の経験から得られるインプリケーションを引き出そうというものである。研究チームでは、政策面での比較検討・評価を行うには、両地域の政策枠組みを単に比較するだけでは不十分であると考え、両地域の自然条件、歴史・文化、政治・経済等の共通点及び相違点にも細心の注意を払った上で、両地域の環境問題及び主要な地域（多国間）環境取組の現状把握・分析を行った。

紙面の都合上、平成13年度～15年度までの3ヵ年の研究を通じて得られた成果をここで紹介するわけにはいかないが、バルト海沿岸地域の経験からの政策面でのインプリケーションは、概ね以下の3つのレベルに集約されるものと思われる：①科学的事項、②政策そのもの（政策枠組および個々の要素政策の詳細）、③政策枠組構築の政治的プロセス。

この3つのレベルのうち、①のレベル、すなわち酸性雨や海洋環境が起こる科学的メカニズム等について、バルト海沿岸地域の経験から得られる知識は大変貴重である。現実社会でも、すでに科学者レベルでの交流も進み、政策作りの場にも反映されつつある。しかし、②については、なかなかインプリケーションを引き出すのが容易ではないというのが一般的見解であろう。欧州の長距離越境大気汚染条約（酸性雨管理）やヘルシンキ条約（海洋環境管理）をそのままアジアで模倣しようとしてもうまくいかないであろうし、また仮に作ったところで真の問題解決につながるか（環境負荷低減につながるか）は疑わしいと考える有識者も多い。

②のレベルに関して、政策の有効性を規定する条件として、経済レベルや政治体制の一体性／多様性が議論されることがしばしばある。つまり、経済レベルが比較的高く、政治的にも一体性がある欧州だからこそ、ああいった条約作りが可能であったという議論である。この議論には一定の説得力があるのだが、バルト海沿岸地域の政策枠組みに限って言えば、政策枠組みが構築された（＝条約が成功裡に締結された）1970年代、この地域は現在ほど経済レベルが高い先進国グループから構成されていたわけでもなければ、汎ヨーロッパ思想に基づく強い地域的一体感をもっていたわけでもなかった（むしろ欧州経済共同体は、条約に消極的であった）点は、実はあまりよく認識されていない。

ではなぜ地域として政治的・経済的一体性が欠ける状況で、バルト海沿岸地域では包括的政策枠組みが成功裡に構築され得たのか。この点に関しては、③のレベルにおける論点、すなわち政策枠組みの構築する上でどのような政治的プロセスを経たかという点が、きわめて重要だったのではないかと私は考えている。政策分野を問わず、政策アイデア自身がいかに優れていても、それがきちんとした政策手続きを経ない限り受容されないという

のは、国際・国内社会を問わず、よくあることである。地球環境政策においても、政治的プロセスが重要である点は変わらないはずである。こういった私の見方は、バルト海沿岸地域での現地調査を通じてますます強くなった。バルト海沿岸地域の政策枠組み構築プロセスにおいて、被害国側が加害国を政策枠組みに引き入れるためにとった数々の戦略や、政治的プロセスの作り方には、目をみはるものがあった。

近年、地球環境問題が重要視されるようになって、地球環境政策研究を志す者が多くなった。ただ、多くは①レベルに関する研究に従事しており、②レベルの研究者の数はやや少ない。③レベルにいたっては、研究層が非常に薄いといわざるを得ない。にも拘らず、真に有効な地球環境政策を考えるためには、③レベルでの研究は不可欠である。しかし、現実に役に立つ政策提言が求められるという地球環境政策研究の性格を鑑みれば、③レベルの研究が現実の政策提言に直結するとは考えにくい。そういった点からすれば、③レベルの研究は、地球環境政策研究の最前線というよりは基盤研究の一つとして位置づけられるべきものなのかもしれない。

成功する地球環境政策の政治的プロセスには、果たして、何らかの普遍性や法則性が見出せるかであろうか。折角研究の前線から離れる時間をいただいたのだから、この1年子育てをしつつ、そのようなことも少し考えてみようと思っているところである。

知究人 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。今回は原稿依頼中ですので、お休みします。次号の第3回目は、国際学部4期生の石原庸兆氏にお願いしています。第4回以後の執筆者をもし、同窓生で適任の方がいれば、ぜひ情報をお寄せ下さい。現在、原稿依頼のため連絡リストを作成中です。

フォーラム 第4号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。2004年の秋を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦勞しています。)今回、第11号に寄稿をお願いしたのは、現在地域医療活動に携わっている社会の磯谷研究室 OG・降籬さんです。

◎ 3期生近況報告 『医大研究補助員をほそぼそとしています』

降籬 幹子

私の身は、日本のへき地にいます。

大学院時代の研究テーマは医療保険制度であったために、その探求手段として、1930年代のアメリカ医療保険導入論議を扱いました。1930年代に身を置き、慣れない英文資料と格闘していました。大学院を修了しての私は大きく変化して、日本各へき地に身を置く環境にあります。

現在、自治医科大学地域医療学部門で研究補助員をしています。医大各教室では、いくつもの研究プロジェクトを遂行しており、多くの研究には研究補助員が配置されています。私は、JMS コホート研究に、非常勤の保健師の地位で仕事をしています。その仕事は、対

象地区に出張し研究データを集め、大学内では整理・処理・分析をしています。(私は保健師資格を持っていて、行政勤務していました。)

ちなみに、JMS コホート研究は 12 年前に開始された研究であります。自治医大は、昨年度に 21 世紀 COE プログラムにおいて「先端医科学の地域医療への展開—大規模地域ゲノムバンク—」を採択されました。JMS コホート研究は、COE 採択理由の基盤となっている研究です。

コホート研究とは？その課題とは？

ちょっと、ここで専門的説明します。コホートとは、共通因子をもった個人個人の集団 (JMS コホート研究では 12,490 人：9 県 12 町村) を意味します。長年その集団を追うことで、イベント発症 (対象者が脳卒中や心筋梗塞など疾病に罹患。その発症時データが必要。) や対象者死亡原因、と要因 (例えば喫煙や高血圧) の関連を分析ができます。

公衆衛生学のオーソドックス研究手法で、素人からみれば簡単にできるようですが、長年追跡することは容易ではありません。10 年以上も経過しているゆえ、いろいろな状況は変化しています。

次のようなことが研究運営に壁を作っています。第 1 に、データ収集は医療関係機関と連携が最重要課題であります。医大独特な学閥関係とか、データ源情報の年月が経っていることで収集不可能とか、容易にデータ収集ができない状況です。第 2 に、データ収集の源である対象町村は市町村合併が進んでいて、町村の状況が大きく変化していることです。

研究終盤戦ということもあり、データ収集は最大課題です。前途した課題解消をするための 1 つとして、年 2 回全体会議を開催しています。各地区の医師・保健師・事務職らの人間関係形成、データ共有、研究成果討議などが目的です。そして、現地では首長などに予算経常や研究業務の理解得るために根回しも大切です。具体的な根回しの 1 つとして、対象地区の岐阜県高鷲村・和良村は今年 3 月に、郡上市になりました。新市長の理解を得ようとする働きをする医師らはまさに政治的な行動でした。良くも悪くも、研究者は研究能力だけでなく、政治能力がある程度必要であると再認識しました。

今後の研究動向は、今年度中に追跡をもれなく完了させ、データを整備します。その時点で研究運営は終了します。その後 1-2 年で解析・論文執筆し成果を世の中に出し、全国または対象地域住民に対する保健活動に成果を活かしていく予定だそうです。

この 1 年 5 ヶ月で学んだこと

学んだことは、ネットワークの研究運営、それも学内だけでなく、全国の関係機関の連携の大切さです。コホート研究では論文にしまえば、データが並べてある人間味がない結果となります。しかし、研究成果を出す事前のデータ収集では、多種職及び他地域の連携が最重要課題であり、それを継続させるとは安易なことではありません。密な連携なしでは研究は運営継続できなかつたと実感しています。「結局は人と人のつながりだ」とあたりまえの事を、JMS コホート研究に関わり学ぶことができました。また、終盤戦の研究

に関われたことも、舞台の表裏（医局はやはり白い巨塔？）も知ることができ、大規模研究運営手法も学べました。私は単なるパート研究補助員ですが、以上のような学びをコホート研究業務の中で勉強させていただき、JMS コホート研究チームの医師や保健師、事務職の方には恵まれています。

そして、全国に出張することは、現地住民の出会いは意気なものです。関西方面に行くと、関西弁がうつり、帰宅しても関西弁で話をする自分がいます。また、新たな土地に接することは多様な思いをはせることも多いです。淡路島北淡では、大震災復興がめざましい中、自分の家に帰れない住民がいて、区画地域の土地はポカリと空いています。健康も害する人も多い気がします。静岡県佐久間では、「なんであんな山中に1軒だけで住んでいるの？」と、便利なところに住む自分の価値観で判断していることに、はたと気づいたりもしています。

日本は狭いとはいえ、多様な文化があり多様な人達が住んでいます。日本を知って、更にグローバルな視野が広がると思っています。私の活動フィールドは日本ですが、日々の人と出会いを大切にし、学んでいくつもりです。

蛇足ですが、データ管理はかなり取得しました。チームの医師らには、「論文書けば」と言われていましたが、実行ができない状況です。今後、保健師の立場での論文を書きたいと思っています。

最後に一宇大大学院での学んだことがプラスになったことー

医大に保健師で籍をおいているので、国際学研究科の学びは直接活かすことは少ないです。しかし、大学院では「感じる・考える」という感性を知らぬ間に磨いていただいたと、実感しています。多様なフィールドで活躍している先輩・後輩も共通すると思いますが、知らず知らずにできている能力であり、結構、宇都宮大学大学院国際学研究科修士の強みかもしれません。更に、資料の読み方や論文の書き方も学べたことはプラスになっていることだと思います。

出張先でおいしいものを食べすぎたのか、師匠である磯谷先生にしごかれなくなったせいなのかわかりませんが、私の横サイズが広がってきました。自分の勉強時間は極端に減りました。この手記を書いたきっかけに、緊張感を持って、自己勉強時間も増やしていきたいと思っています。（2004年8月27日手記）

（国際学研究科 国際社会研究専攻 第3期修了生）

編集後記：限られた時間でのニュース発行、同窓生の皆さんのご感想はいかがでしたか？ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。 **同窓会会員の皆様へのお願い：**
住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 global@minakuru.net
